



## たった一人の学芸員

構想の大枠を描き、「これならイケる」という手応えをつかんだ SaaS 版収蔵品管理システムの開発。私は、喜び勇んで館の皆様にお知らせすることにしたのですが……最初の館で、早くも自分の考えの甘さに打ちのめされました。

現場を知る私たちなら、現場で使える「定番」を作れるはず。こうして構想がスタートした SaaS 版収蔵品管理システムですが、当初は単に「簡易的な I.B.MUSEUM を安価にて提供する」ことを描いていました。

管理項目設定の自由度は、SaaS 化で確保できそうな雲行き。社内で議論を重ねるうちに、開発スケジュールもだんだん見えてきました。そろそろ、館の皆様のご意見を伺ってみたい……ということで、私はちょうど訪問を予定していたいくつかの館で、構想をお話することにしました。

### 「どの業務を軽減したいですか？」

SaaS 版の開発で大きなポイントを占めていたのは、「学芸員の業務動線をもう一度見直し、システムの機能を細かくリンクさせる」という設計思想です。収集に調査研究、保存修復、展示替え、教育普及……ひとことで学芸業務といっても、仕事は山ほどあります。その中で、特に負担を軽くしたい部分があるとすれば、それにもぜひ対応したい。

前回お送りした学芸業務と資料情報の相関図をベースに、「システムの機能拡充で軽減できそうな業務は、この図の他にないか」という主旨で、できるだけ多くの館にヒアリングをお願いするつもりでいました。

スタッフとともに、ある美術館を訪ねた時のこと。

業界全体が抱える現状、システム導入にまつわる課題点、SaaS 版 I.B.MUSEUM のコンセプト。対応して下さった学芸員にご説明すると、興味深そうに耳を傾けておられました。これなら、貴重なアドバイスがいただけそうだと考えた私は、「最も負担を軽減したい業務は？」と質問しましたが……答は、まったく予想外のものでした。

### 「ウチは学芸業務をこなせていない」

その学芸員は、私の問いに対し、しばらく無言で考え込んでおられました。そして、目の前に掲げた相関図を指して、こう仰ったのです。

「そもそも、ウチは満足に行く仕事できていません」

小規模ながら著名作家の作品を多数所蔵しており、いつも入り口には団体客のバスが停まっているような人気館。その学芸員が、苦しげに「仕事できていない」と仰るとは……驚いた私は、事情を細かく訊ねました。

館の学芸員は、彼 1 人だけ。館長の他は、アルバイトとボランティアのみで人員が構成されている。規模が小さい割に来館者が多いため、館長も彼自身も総務的な仕事に追われることになり、展示の企画を考える暇もなく走り回る日々が続いている……とのことでした。

学芸員が 1 名しかいないため、作品の保存方法ひとつを取っても、先輩に学ぶことができない。学会の集まりに出席して教を乞える人脈を広げようにも、参加のための会費すら予算が出ない。収蔵品から考えて、もっと地域に尽くせるはずなのに……その言葉は、悲痛そのものでした。



どんなにコストを下げ、どんなに多機能なシステムを構築しても、館が抱える問題はひとつ解決しない……入力も登録もできないのだから！ それで、結論でした。

システム開発会社ごときでは、この素晴らしい収蔵品をお持ちの館を救うことなどできない。私は、自分が「無力な部外者」であることを知り、打ちのめされました。